東日薬会報

発行所
北海道石狩郡当別町金沢1757番地
東日本学園大学薬学部同窓会
☎(01332)3-0301 直通・FAX
☎(01332)3-1211 大学代表
編集人 遠藤 泰
発行人 星野太郎

印刷所
富士プリント株式会社
札幌市中央区南16条西9丁目
☎ 代表 (011)531-4711

東日薬 創立10周年記念祝賀会 開催される

東日本学園大学薬学部同窓会「東日薬」創立10周年記念祝賀会がさる7月29日(土)ホテル・アルファサッポロにおいて開催された。この祝賀会は東日本学園大学薬学部同窓会会員が日頃お世話になっている北海道医師会、歯科医師会、薬剤師会および母校の先生をお招きし、この10年間のご支援とご指導を頂いた御礼と今後ともかわらぬご支援とご指導を頂くことを主旨とし開催された。

北海道薬剤師会からは田所一栄会長をはじめ青木勇、倉持源三郎、斉藤元護副会長、足立純則帯広支部長、後藤哲志小樽薬剤師会理事、栄井信札幌薬剤師会副会長、多田定男室蘭支部長ならびに本間正一北海道薬剤師会公衆衛生検査センター所長など数多くの先生方にご多忙中のところをご出席をいただいた。また北海道医師会からは吉田信会長、北海道歯科医師会からは船本達世副会長に出席して頂き来賓65名、同窓生120名の合計185名の会であった。

開催にあたり同窓会会長星野太郎が創立以来10年間のあゆみとご支援ご指導頂いた御礼と今後ともかわらずのご支援とご指導を頂きたいと来賓の諸先生に述べ、これからも医療の発展のため努力することを誓った。

来賓の挨拶では先ず、吉田信北海道医師会会長が、医療において、サイエンス・アート、ヒュウマニティおよび医、歯、薬の三位一体が重要であると強調し、今後の国民の福祉、保健、医療での活躍を祈念すると述べられた。つづいて船本達世北海道歯科医師会副会長が同窓会の意義の深さについて語り、同窓生同士が協力し医療界の発展のために貢献することを希望するとの祝辞を述べられた。田所一栄北海道薬剤師会会長は、多様化する医薬情報について、医、歯、薬の充分な連絡をとり、医療福祉の発展のために邁進しなければならない、その責任は薬剤師の立場にあるとし、東日本学園大学薬学部同窓会のますますの発展を願うとの祝辞を述べられた。前田和彦前東日本学園大学理事長は「我々東日本学園大学はまだまだ若い大学でありこれから大学にとって同窓会はなくてはならないものである。皆で協力し教育、運営に参加し大学を応援してほしい。薬学部同窓会のますますの発展を願う。」との祝辞を述べられた。安倍三史東日本学園大学学長は「現在の東日本学園大学薬学部同窓会は来賓の方々の深いご理解とご支援があったからこそ存在するのであり、これからもこの若者たちにご指導をお願い致します。」と述べ祝杯の音頭を取られました。

祝宴に入り、久し振りに会った恩師、先輩、同期、後輩と昔話に花が咲き、あちらこちらに恩師を囲む姿が見られ、恩師に名刺を渡し学生時代の御礼を述べ、沢山の後輩を入社させてほしいとお願いする姿が見られた。祝宴の中では薬学部同窓会の設立にご協力頂いた久田末雄元薬学部長が名古屋からお見えになりテーブルスピーチを頂いた。兄弟関係である東日本学園大学歯学部同窓会川上智史会長は「薬学部同窓会と歯学部同窓会が協力し医療界の発展のために貢献すること。母校の益々の発展のために努力しましょう。」と述べられた。最後に高田昌彦東日本学園大学薬学部長が「数多くの来賓の先生方々に出席して頂き東日本学園大学と薬学部同窓会にとってこのように心強いご支援はない。今後ともかわらずのご支援とご指導をお願いいたします。同窓生には本学の開学の理念を忘れることなく医療界の発展のために貢献することを希望します。」と述べ祝杯の音頭を取って頂き東日本学園大学薬学部同窓会創立10周年記念祝賀会は盛会のうちに終了した。

薬学部同窓生各位はこの祝賀会に出席し、母校の先生のかわらぬ愛情と、医療三師会の先生方の支援を再確認し、医療の発展のため努力することを固く心に誓ったであろう。

山崎信彦(2期)

第10回東日薬総会開催

東日薬10周年祝賀会に先立ち第10回東日薬総会が開催されました。本年度は役員改選の年でありますが今回新しい決議案として理事を各期からそれぞれ3名ずつ選出することになりました。昭和63年度本部事業報告および決算報告、平成元年度本部事業計画および予算案もあわせて承認されました。

昭和63年度 本部事業報告

- 4月14日−16日 新入生オリエンテーション参加 (大雪青年の家・8名)
- 4月16日 第1回同窓会役員会 (63年度活動打ち合せ)
- 5月17日 第2回同窓会役員会 (総会打ち合せ)
- 5月29・30日 総会案内準備・発送および会報発行
- 6月1日 同窓会室引越し (総合図書館1F) リクルート大学入試広報との打ち合せ
- 6月7日 第3回同窓会役員会 (総会打ち合せ) 同窓会室整理
- 6月21日 第4回同窓会役員会 (総会最終打ち合せ)
- 6月25日 第9回同窓会総会(道新ホール) 第4回東日薬講演会
- 7月5日 第5回同窓会役員会 (会報打ち合せ)
- 8月2日 第6回同窓会役員会 (会報打ち合せ)
- 9月1日 会報発行
- 9月6日 第7回同窓会役員会 (名簿打ち合せ)
- 10月4日 第8回同窓会役員会 (名簿打ち合せ) 名簿作成 (新卒業生・11期生および訂正分)
- 10月29日 第4回道北支部総会出席
- 11月5日 東日薬・札幌支部ボウリング大会参加
- 11月8日 第9回同窓会役員会 (会報打ち合せ)
- 11月9日 大学・東日薬共催 第3回医療薬学公開講座
- 12月6日 第10回同窓会役員会 (会報打ち合せ)
- 1月1日 会報発行
- 1月18日 第11回同窓会役員会 (創立10周年記念祝賀会準備)
- 1月30日 新卒業生の入会案内
- 2月10日 第12回同窓会役員会
- 2月22日 同窓会・大学関係者懇談会出席
- 3月9日 中谷省三先生送別会出席
- 3月9日 第13回同窓会役員会 (卒業生入会案内準備・祝賀会打ち合せ)
- 3月20日 卒業生の入会案内・謝恩会参加 (祝賀会打ち合せ)

東日薬新役員紹介 (平成元年〜3年)

会長 星野太郎
副会長 山崎信彦(総務) 千葉一基(支部総括) 遠藤泰(会報) 多田正人(名簿) 馬原礼二郎(企画) 松田浩紀(企画)
会計 野地裕美
監査 剣持暁美 中谷洋子
理事
一期 岩田克憲 玉木正純 的場繁彦
二期 和泉千尋 岩田典剛 村山克彦
三期 田中稔泰 山形道弘 山根克文
四期 剣持暁美 竹内国昭 武村仁志
五期 遠藤修 西村成敏 福田修司
六期 内山英二 片岡修一 田中孝儀
七期 水谷彰宏 吉田嗣 絹矢善夫
八期 江口文明 小笠敦 美濃興三
九期 浜上尚也 白府敏弘 松井聡子
十期 佐藤浩之 柴田隆 山崎紀規子
十一期 秋野光明 中村利彦 野田敏宏
十二期 岩崎洋靖 上野健一 高橋知佐

平成元年度 本部事業計画

- 4月13・14日 新入生オリエンテーション参加 (夕張いこいの家・7名)
- 4月14日 第1回同窓会役員会 (平成元年度活動打ち合せ)
- 5月9日 第2回同窓会役員会 (総会・祝賀会打ち合せ)
- 6月6日 第3回同窓会役員会 (総会・祝賀会打ち合せ)
- 6月28日 総会・祝賀会案内準備・発送
- 7月1日 会報発行
- 7月5日 第4回同窓会役員会 (総会・祝賀会打ち合せ)
- 7月6日 祝賀会当日準備委員選出(学内)
- 7月25日 第5回同窓会役員会 (総会・祝賀会最終打ち合せ)
- 7月29日 第10回同窓会総会 (ホテル・アルファサッポロ) 同窓会創立10周年記念祝賀会 (ホテル・アルファサッポロ)
- 8月 第6回同窓会役員会 第1回同窓会理事会 同窓会会員名簿作成・発送
- 9月 第7回同窓会役員会
- 10月 第8回同窓会役員会
- 11月 第9回同窓会役員会 大学・東日薬共催第4回医療薬学公開講座 (札幌・函館)
- 12月 第10回同窓会役員会 会報作成
- 1月 第11回同窓会役員会 本部・札幌支部合同新年会 新卒業生の入会案内説明
- 2月 第12回同窓会役員会
- 3月 第13回同窓会役員会 卒業生の入会案内 謝恩会参加

二期会

山崎 信彦(2期)

昨年の11月より準備を行っていた東日本学園大学薬学部二期会が平成元年九月二十三日(土)札幌グランドホテルにおいて開催された。この会は母校を卒業し10年がたったのでまた母校に集まり親睦を深めることを目的として行われた。全国各地から50名の二期生が集まった。母校からは多忙中のところ前田理事長(当時)、安倍学長、田辺、高田、藤間、羽賀、町田、門間、高橋、武智、小田、亀田先生、土産田事務局長の出席を頂いた。

会はまず山田君の司会で始まり、発起人代表の村山君が挨拶を行い、来賓と二期生に出席して頂いたことにおれを述べた。前田理事長、安倍学長、田辺先生よりそれぞれ大学の近況と思い出話をまじえた挨拶を、高田先生には乾杯の音頭をとって頂いた。ユーモアをまじえた挨拶を聞いているうちに学生時代にタイムスリップしてしまい、年をとってしまったのか、あるいは職業病とも言える無表情さと無口さはすっかり消え去り10年以上も前のあの学生時代の顔にもどっていた。

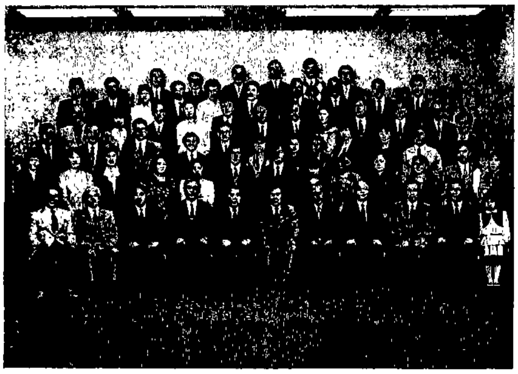
歓談中での先生の近況報告の時にはあの授業風景を再現したかのように終始ガヤガヤし、なつかしいやら、なさけないやら複雑な気持ちであった。(学生時代まじめだった者は10年たった今でも前で先生達のお話を静かに聞いている。人間そんなに変わるものではないということを再確認した。)

二期生の近況報告は藤村君によりそれぞれのエピソードを交えた迷紹介によりもりあがり、10年がたち肥った者、はげた者、老けた者、若くなった者がオタチ台にあがり近況報告を行うたびに会場から歓声があがっていた。最後に藤間先生より万歳三唱を頂き、また10年後に集まることを約束し会は無事に終了した。

2次会に席を移し、1次会では話し足りなかった話に花が咲き、学生時代の自分と今の自分が激しく交差し不思議な気持ちになり、また10年後が楽しみであり必ず二期会を開こうと深く決意した。

最後に、盛大に終えた二期会であるが、卒業してから10年もたち友達の結婚式もなくなり仲間が集まることがほとんどなくなってしまった今では仕事や子育てでどうしても出席出来なかった者のことを考えるととても残念である。みんなが集まれるような名案はないものだろうか。

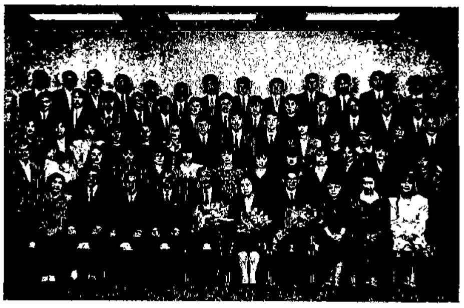
また、亡くなった教養部の後藤先生、在学中に病気で亡くなった内海君、中退した者、交通事故でなくなった毛笠君のことが思い出された。



高田同門会

水岡 英幸(11期)

去る10月7日に、高田同門会が盛大に開催されました。私はこの時司会という大任を受け、非常に勉強にもなり、大変な一日でした。今回の高田同門会には薬剤学教室・製剤学教室の卒業生ならびに院生等々、高田先生に御世話になった方々が一同に会して思い出を語りあう一日となりました。薬剤学教室第一期卒業の武田清孝さんがまず発起人代表として挨拶を述べ、その後に薬剤学教室第二期卒業の金子達也さんの乾杯の音頭で会が進行していきました。私自身出身教室が生薬学教室で、薬剤学教室のことが全々わかりませんでしたが、薬剤学教室に来てみて、なんて家族的であったかい所なんだろうなと思いました。(生薬学教室もいい所ですよ)今回この同門会参加もはじめてでしたが、参加出来て本当によかったと思います。諸先輩と語り合うことも出来、本当に有意義な一日でした。また今度の同門会には司会じゃなくて参加したいと思います。また今回の同門会に参加出来なかった方から、多くの祝電が届いていました。会も半ばすぎになって、各期卒業の代表メンバーから、思い出を語るということで学生時代の思い出、特に高田先生との教室での思い出印象に残ったことなどを、切々と語ってもらいました。今回の同門会では12期卒業のニューフェイスも参加しており、私も後輩に今の仕事はどうだい、大変じゃないかいといった語らいをしました。また高田先生は終始卒業生のいるテーブルを回られ、一人一人に激励の言葉をかけられ、またなつかしい思い出話をされている御様子でした。高田先生の奥様もこの会に参加なされ、よく高田先生宅へ行かれた先輩達が奥様に学生時代の御礼を言っている光景も見うけられました。この会で今回薬剤学教室第三期卒業現在当教室助手をされている千葉一基先生が、薬学博士の学位を取得されたことを祝って、高田先生から御言葉をいただき、その後につづいて千葉先生から挨拶がありました。千葉先生に製剤学教室助手の八木直美先生から花束の贈呈がありました。挨拶の席上千葉先生も緊張しているせいか、いつもの歌って踊れるエンターテイメント助手の姿はどこへやらの状態でした。とにかくてれまくって、この花束贈呈は無事終りました。



このように会が進行していって、なんとか自分も司会がつとまっているなというのを、自分で確認しました。私の司会のアシスタントとして、薬剤学教室12期卒業(現在当教室の研究生)の柴田隆君が、走りに走り動きに動いてよく頑張ってくれました。柴田君がいなければ司会もうまくつとまっていなかったように思います。"今回高田同門会の役員をやられた方々本当にごくろうさまでした。"会も終りに近づき、高田先生と高田先生の奥様への花束贈呈の場面になり、高田先生と奥様共々御喜びになったものと思われます。六時から八時という二時間もあっという間に過ぎ、会も本当に終りになって、最後に製剤学教室助教授の関川先生の乾杯の音頭のもと、今後の高田同門会一同の前進と繁栄を切に願い、無事大成功に同門会を終えることが出来ました。二年あるいは三年に一度の同門会であると思いますが、この同門会が先輩・後輩のよきふれあいの場として、また先輩から様々な面で教えを乞う場としてどれほど大切なものかということを、私自身もしみじみと感じました。薬剤学教室はコンパの多い教室として名高かったのは私が薬剤学教室に入って一年目で経験をしました。しかし本当にその中で多くの思い出を作れたように思えます。薬剤学教室に来て、皆私のことをおまえ性格が変わったなといいます。いったい私は今までどのような性格だったのでしょう?本当に勉強の面ばかりでなく、社会に出た時の社会訓練もこの教室に来て行えたように思います。

薬剤学教室に来たら酒が強くなります。いいことなのか悪いことなのか?来年は大学院生が四人も入ることになっています。薬剤学教室の人気をもの語っているのではないでしょうか。これもひとえに高田先生の人柄によるものであると思われます。これからもよき後輩を多く薬剤学教室から輩出し、各分野で東日本学園大学薬学部薬剤学教室出身との誇りも高く頑張っていただきたいなと思います。私も薬剤学教室に在籍していられるのもあと本当に少しとなりましたが、最後の最後まで精一杯頑張っていきたいと思います。薬剤学教室のモットーの「勉強する時には大いに勉強し遊ぶ時には大いに遊ぶ」という精神がすごく好きです。中途半端っていちばんよくないと思います。この精神をモットーに教室在籍の間はやっていきたいと思います。私も来年からはOBとして諸先輩同様に後輩の育成につとめていきたいと思っております。本当に今回の高田同門会は高田先生の奥様も参加してくださり、また多くの卒業生の方々諸先生が参加してくださり、盛大に終えられたことを、皆様方に深く御礼申し上げると同時に、感謝致します。これからも高田同門会を皆さんの手でもっとよいものにしていきましょう。ではこの辺で失礼します……

薬理学教室同門会

竹中加代子(12期)

さる、9月15日(土)午後6時よりホテル・アルファ札幌に於いて第二回薬理学教室同門会主雪会が行われました。前薬理学教室教授で現在本学客員教授であられる田辺恒義先生、現薬理学教室教授南勝先生、助教授門間芳夫先生以下、1期から12期までの卒業生を含む総勢28名が会し開かれました。会の進行は遠藤泰先生がつとめられ、はじめに田辺先生より御挨拶があり、南先生の音頭で乾杯して開会しました。

同門会は昨年の第1回に引き続き2回目の開催ですが、私達12期生は初めての参加で、ほとんどの先輩方とは初対面なので緊張しました。しかし、乾杯のあと歓談にうつり、次第に緊張もほぐれました。私達は最後の音別経験組なので懐かしい寮生活や、白糠の町、深い霧、人里離れた教養部などの話に花がさきました。また、同期生は本学に残っている人が多いので先輩から最近の大学の様子などを尋ねられていたようです。私も、来年4月から大学に戻るので12期の同期会がいつでも開けるのではないかという冗談もありました。

そうして、12期生が隣のテーブルで御馳走をぱくつきながら騒いでいるところへ田辺先生がいらっしゃって一人一人に就職や進学後の様子などを聞かれていました。私達12期生は、薬理学教室教授が田辺恒義先生から南 勝先生へ代わられてからの学生でしたので、田辺先生の講義を受けたことがなく、先生とお会いしたのもほとんど初めてでしたが、田辺先生はお元気そうな御様子でした。先輩から主雪会という名前は田辺恒義先生の雅号から頂いていると教えていただきました。蛍雪の功にもかけているとのことで、本当に良い名称だと思いました。

歓談の途中で、同門会会長の引き継ぎが行われ、田辺先生から同門生より選ばれた玉木正純氏に引き継がれました。その後、恒例の全員の自己紹介があり、先輩方のユニークなお話しが聞けました。病院薬剤師やプロパーだけでなくさすらいの薬剤師の先輩もいらして、とても楽しい自己紹介でした。残念ながら同門会に出席できなかった同門生の方から届いた近況報告の葉書が黒板に張り出され、話の種になっていました。

教室開設時より13年にわたり助手をつとめられてきた亀田治子先生が9月いっぱいで本学を辞職なさることが報告され、南先生より9月付けで亀田先生の講師昇格の決定が発表されました。亀田先生は1期から12期まで全ての卒業生を知っていらっしゃって各期のかすがいとなっておられたので残念に思ってらっしゃる方も多いようでした。私も、亀田先生には卒業研究をはじめ公私共に大変お世話になりましたので御辞職はとても残念ですけれども、新しい職場サンド薬品(株)での御活躍を御祈りします。後任として大学院博士後期課程に在学している浜上尚也院生が、10月1日付けで当教室助手に着任することが報告されました。

最後に、当日、札幌セントラルゴルフクラブに於いて行われた同門会プレ・ゴルフコンペの結果が報告され、優勝なさった門間先生に田辺先生より優勝カップが授与されました。この優勝カップは田辺先生より同門会へ寄贈されたもので、来年より毎年8月末に行われる同門会ゴルフコンペ(田辺杯)での優勝者に引き継がれるものとなりました。来年は誰の手に渡るか楽しみです。

会は盛会の内に予定の時間となり、門間先生による乾杯で閉会いたしました。しかし、限られた時間ではまだまだ話し足りないようで、その後幾つかのグループに別れて薄野方向へと姿を消してゆきました。

平成二年度 入学試験要項

		薬学部		歯学部		歯科衛生士専門学校
募集人員		120名		96名		50名
		一期	二期	一期	二期	一般
		定員の約55%	定員の約15%	定員の約55%	定員の約15%	定員の約50%
出願期間		1月8日(月)〜1月29日(月)	2月19日(月)〜3月12日(月)	1月8日(月)〜2月1日(木)	2月19日(月)〜3月12日(月)	1月8日(月)〜2月1日(木)
試験日		2月2日(金)	3月15日(木)	2月5日(月)	3月15日(木)	2月5日(月)
合格発表日		2月7日(水)	3月19日(月)	2月9日(金)	3月19日(月)	2月9日(金)
入学手続期間		2月13日(火)〜2月19日(月)	3月22日(木)〜3月27日(火)	2月13日(火)〜2月19日(月)	3月22日(木)〜3月27日(火)	2月13日(火)〜2月19日(月)
試験場		札幌・盛岡・東京大阪・福岡	札幌・東京	札幌・東京・大阪福岡	札幌・東京	札幌
試験科目・配点・時間	外国語	・英語Ⅰ・Ⅱ〈100点・60分〉		・英語Ⅰ・Ⅱ〈100点・60分〉		・英語Ⅰ〈100点・60分〉
	数学	・数学Ⅰ〈100点・60分〉		・数学Ⅰ〈100点・60分〉		――
	理科	・化学および生物(それぞれ理科Ⅰの範囲を含む)から1科目選択〈100点・60分〉		・物理・化学・生物(それぞれ理科Ⅰの範囲を含む)から1科目選択〈100点・60分〉		――
	その他	・面接		・小論文〈100点・40分〉 ・面接		・国語Ⅰ・Ⅱ(古文、漢文を除く)〈100点・60分〉 ・面接
入学辞退締切日		3月22日(木)	辞退は認めない	3月22日(木)	辞 は認めない	3月22日(木)

札幌医療福祉専門学校						
		看護学科		介護福祉学科		
募集人員		40名		80名		
		推薦	一般	推薦	一期	二期
		約10名	約30名	定員の約30%	定員の約50%	定員の約20%
出願期間		1月22日(月)〜2月10日(土)	2月13日(火)〜2月28日(水)	1月22日(月)〜2月10日(土)	2月13日(火)〜2月28日(水)	3月8日(木)〜3月22日(木)
試験日		2月12日(月)	3月2日(金)	2月12日(月)	3月3日(土)	3月24日(土)
合格発表日		2月15日(木)	3月6日(火)	2月15日(木)	3月7日(水)	3月26日(月)
入学手続期間		2月19日(月)〜2月23日(金)	3月8日(木)〜3月14日(水)	2月19日(月)〜2月23日(金)	3月9日(金)〜3月15日(木)	3月28日(水)〜3月30日(金)
試験場		本校	本校	本校	本校	
試験科目・配点・時間	外国語	――	・英語Ⅰ・Ⅱ〈100点・60分〉	――	――	
	数学	――	・数学Ⅰ〈100点・60分〉	――	――	
	理科	――	・理科Ⅰ(生物・化学の分野)〈100点・60分〉	――	――	
	国語	――	・国語Ⅰ・Ⅱ(古文・漢文を除く)〈100点・60分〉	――	・国語Ⅰ・Ⅱ(古文・漢文を除く)〈100点・60分〉	
	その他	・作文 ・面接	・面接	・作文 ・面接	・面接	

続・教室だより

薬品物理化学教室

物理化学教室の現状をお伝えしましょう。現在スタッフは、山本芳久教授、関崎春雄講師、豊田栄子助手、そして私の4人です。これに4年生13名が加わって、計17名で構成されています。最近の傾向として、教室に配属されてくる4年生は、女子が多いせいかとても賑やかです。この前も、ゼミ室で学生が盛り上がっていた時、山本先生に「ゼミ室がうるさいですね」と言うと、「さっきから学生はずっと話していますよ」と、平気な顔で仕事をしています(昔だと、〝プッツン〟していた様ですが)。これも女子が多くなった原因の一つでしょうか。

初めに先生方の研究テーマについてですが、当研究室の主な研究テーマは1:イリド金属錯体の研究 2:混合配位コバルト(Ⅲ)錯体の研究 3:異常電子状態コバルト錯体の研究 であります。テーマ1については、山本教授みずから学生を相手に精力的に合成実験を行っておりました。しかし、最近はあまり実験をしている姿は見られなくなりました。これは本研究がまとまりつつあることと、合成した化合物の薬理作用の検討へとテーマを展開しているためだそうです。テーマ2については、関崎講師、豊田助手と工藤、附田、新屋元助手(いずれも旧姓)、それに吉井元助手が実験を行ってきました。そして、これまで合成が困難とされていた混合配位コバルト(Ⅲ)錯体の合成条件を確立し、さらに異性体の構造とNMRスペクトルとの関係や異性体の相対的安定性などについての法則性の確立を目的に研究を続けています。テーマ3の異常電子状態コバルト錯体の研究については、テーマ2をさらに発展させたもので、北大工学部の金野先生との共同研究でXPSを測定することにより、これまで解明できなかったCo原子、および配位子の電子状態の解明が進み、新しい知見がどんどん得られるようになりました。豊田先生は、先述したように、最近山本先生が研究をしなくなったので、後かたづけをしなくていいから自分のことができる、と言っています。

次に、辞められた先生方の〝その後〟について、工藤さんは、札幌で主婦をしています(子供2人)。附田さんは、青森の十和田市で子供を育てながら管理薬剤師としてがんばっています。新屋さんは、今年の夏結婚したばかりで、青森の八戸で新婚生活を送っているそうです。吉井さんは、江別で優雅(?)に独身生活を楽しんでおられる様で、時々学校の方にも顔をだしています。

そういえば、最近山本先生は健康を気にしているのか、「このごろお腹が出てきましたねえ」と言って時々思い出した様にラジオ体操をなさっています。又、豊田先生に言わせると山本先生の髪も大分さみしくなってきた、ということですが山本先生本人は写真などをみて(ただし正面から写したものですが)、「先生もまだまだ若いですねえ」と、笑っています。関崎先生の方も山本先生に負けず劣らずといった感じで、特に髪に関しては実際の年齢以上のものがあります。以上、教室の近況報告をさせていただきましたが、より詳しいお話を聞きたいという方、先生方の〝歳〟による変貌ぶりを自分の目で確めたいという方、どんどん遊びにいらして下さい。

公文登代(12期)

放射薬品化学教室

たいへん寒くなってまいりましたが卒業生の皆さんは如何お過しでしょうか。

本年度もそろそろ卒業試験及び国家試験が目前にせまってきて、教室内もただならぬ雰囲気につつまれてまいりました。

それらのことを含めて、我が放射薬品化学教室の近況を、お知らせしたいと思います。今、研究室は、関助教授(アイソトープ研究センター主任)、大倉助手、及び4年生8名と小沼(研究生)で構成されています。

現在、研究室ではDNAの光感受性を高めるハロゲン化ウラシルの光反応についての研究がすすめられています。

関先生は坂東先生(5期)や松田先生と協力しLUMO−LUMO相互作用によって制御される、新しい結合様式の反応であることを見出し、現在その一般性の確立に全力をあげられているようです。

大倉先生は「ハロピリジンと芳香環化合物の光反応(特に2−ヨード及び2−フルオロピリジンの光反応性)」の研究で、この9月に学位を取得されました。

猶、今年10月まで助手をしていらした、松田先生(6期)は、国立函館病院に勤務されることになり、今はそちらの方でコンピューター相手に御活躍されていることと思います。

ところで、その松田先生の送別会を兼ねてのコンパでは、松田先生の人気を反映してか、他教室からの女の子の参加も数名みられ、また今年配属された学生の明るさも手伝って、たいへんな盛り上がり様でした。なにしろ普段はたいへんおとなしくて「カラオケなんか大嫌いだ」の松田先生はもとより、関先生や大倉先生までも、自らマイクを握り小指をたて自慢ののどを披露するような一面もみられました。

そんな訳で放射教室のメインスタッフが一人いなくなったわけですが、その穴をうめるべく一人一人が目標をもってそれぞれに努力しているというのが現状です。

以上が、放射薬品化学教室の近況ですが、私個人の感じとしましては、今年は配属された四年生がとても明るく個性的で「新人類」的な人ばかりなので教室としても、とても活気があると思います。

たいへん手短かになってしまいましたが、諸先輩方、大学に御越しの際は、ぜひ御立寄り下さい。

小沼恵一(12期)

薬品分析化学教室

分析化学教室は、藤岡貞彦教授を中心とし、池川助教授、黒沢講師、馬原、吉村両助手のもと、院生1名、研究生1名、学生12名より構成されています。主な仕事の内容としては、胆汁酸の分析を行っています。胆汁酸といいましてもコール酸、ケノデオキシコール酸のような一次胆汁酸、それらが腸内細菌により変換された二次胆汁酸であるデオキシコール酸、リトコール酸など常成分、当研究室により構造の確認された胎児期及び新生児期特有の1β−及び6α−水酸化胆汁酸など多数見いだされており、その組成については大人と子供では大きく異なることを確認した。これら胆汁酸は健常人では脂質及びコレステロールの腸管からの吸収に関与している。又、臨床的な意味としては胆道閉鎖症などに代表される肝胆道疾患時にその血中及び尿中濃度が増加するほか代謝異常成分がみられることよりそれら疾患のマススクリーニング法として注目を浴びている。先日島根医科大学で行われた胆道閉鎖症の1才の男の子への生体肝移植については記憶されている方が多いと思いますがこのような重要な疾患時の肝臓の状態をこれら胆汁酸は的確に示します。これら胆汁酸の簡便かつ正確な分析を行うべくガスクロマトグラフィ、ガスクロマトグラフィ/質量分析、又、特定物質を選択的に測定するイムノアッセイ法、さらには近年注目されている高速液体クロマトグラフィなど各種機器を用い分析を行なっている。これら分析の仕事の他に胆汁酸生合成及び代謝経路の解明も併せて行っている。胆汁酸以外には妊馬尿中より見いだされたカテコールエストロゲンについてその生理作用及び代謝についても研究を行っている。これらの研究は国内でもトップレベルで道内はもとより久留米大医学部、順天堂大学医学部などの小児科関係の医師や薬学系、理学系、生物学系の大学との交流も盛んである。

最後に教室行事としてはコンパはもとより夏、冬の旅行や各種行事への参加と遊ぶことに関しても熱心な教室である。

平林尚之(11期)

生化学教室

ついに、恐れていた教室紹介の原稿の依頼が来てしまい、文才と言うか、文章構成力が欠如している上、漢字をよく知らない私めは辞書を片手に悪戦苦闘しながらこの文を書いているのであります。

私の所属する生化学教室は、渡部、岡本教授、百木、天内、高崎助手の教員五名と、小田、田中、そして私、本永の三名の大学院生、学生十三名で構成されており、渡部教授の御指導のもと、主に腫瘍マーカーについての研究を進めています。

渡部教授は、多忙な身でありながらも総括的なお立場から常に教室全般について気をくばっておられ、大学院生である我々にも研究者としての様々な事柄を教えて下さっています。その上、教務部長として学生のために日夜奔走されています。又、歌のうまさは天下一品で、私などはただ感心するばかりです。

岡本教授も、本校で教鞭を執るばかりでなく、医師として、又俳人として活躍されておられ、口ぐせのように「忙しい、忙しい」と、おっしゃっています。一方、趣味も多才であり先にも書きましたが、俳句、アマチュア無線などを楽しんでおられます。

百木助手は、我々未熟者にとってよきアドバイザーであり頼もしい兄貴の様な存在です。普段は物静かで、おとなしそうな感じですが、学生と一緒にテニスやバトミントンなどをする一面もあります。

天内助手は、私の口から言うのもなんですが、まじめで、しっかりしてて、不まじめの塊の様な私はしばしばたしなめられてしまいます。又、頭の回転も速く、話をしていても楽しいのですが、たまに鋭いつっこみをするので、私などはしどろもどろになってしまいます。

高崎助手は、明るく、ちゃめっけのある人で、時に目が点になるような事を言ったりします。しかし、研究に対する態度は真剣で、見習わなければならない所があります。

次に、小田院生ですが、残念ながらあまり話をしたことがないので、どんな人かはよく知らないのですが、歯学部の研究室でがんばっている様です。

田中院生、彼は東京薬科大学出身で、百木先生の直接の後輩でもあります。もともと微生物専門だったので、当教室に来た頃にはとまどいも見られましたが、最近では教室の雰囲気にも慣れ、研究に燃えています。学生達からも慕われ、又めんどう見がよく、勉強の仕方などのアドバイスもしています。

そして、私、本永は、素行が悪く、いつもふらふらしているため、生化学教室の悪性腫瘍であり、先生方に頭を抱えさせるもとでありながら、自覚症状がないふとどきな奴です。田中院生からは、「生化学教室一のおちゃらけ者だ。」と言われる始末で、これから先が思いやられます。

今年の学生は個性的な者が多く、楽しい教室になっています。さすがに十一月ともなると緊張感が高まり、勉学にも熱が入ってきました。全員一丸となって、卒業、国試の壁を乗りこえてほしいものです。

と言った所が、我が生化学教室の紹介となりますが、私の脳ミソではこれ以上まともな文章を書けませんのでこれで終わりにしたいと思います。

本永貴司(12期)

製剤学教室

皆さん、「製剤学教室」と聞かれて、何を考えますか?今回は、その製剤学教室について話をしたいと思います。

製剤学教室は、七年前に薬剤学教室から分離した、比較的歴史の浅い教室です。現在、高田昌彦教授、関川彬助教授、八木直美助手、剣持晴美助手の四名のスタッフと、横・田中(本人)研究生二名、学生九名からなる少人数の教室ですが、常に笑顔が絶えることのない、明るい雰囲気です。

関川助教授は、時には、父親のように大きく、時には、友達感覚で、語り合える先生でもあります。一見、放任主義のようですが、あくまでも個人の個性や自主性を重んじ、困った時には、影ながら手を差しのべてくれます。そんな先生も、麻雀のこととなると話は別です。学生の方が、気迫負けするくらい熱が入っています。酒量も当然のことながら増えていくわけですが……。麻雀に自信のある方は、是非一度、先生と勝負してみてはどうでしょうか。

八木助手は、母親のように温かい先生で、いつも笑顔で、私達をそっと見守ってくれています。実際、三歳になる雄介君の話題になると、しっかり母親の顔をしています。もしかしたら、雄介君よりも私たちの方が、手を焼かしているのかもしれません。

剣持助手は、一見、厳しそうですが、実際は、やさしい姉の様な存在です。また、本人も気がついていないのかもしれませんが、時々、とてもかわいい表情をすることがあり、これも先生の魅力のひとつです。(実は、ボクもここが好きなんです……)

現在、取り組んでいるテーマは、「ループ利尿薬のひとつである、フロセミドの安定性及び体内動態に関する研究」であり、フロセミドが、光に不安定なため、暗室で実験を行っています。ラットにおけるフロセミドの体内動態を液クロにより分析しているわけですが、暗室での作業が多いため、なかなか苦労も多い様です。

関川先生は〝製剤学Ⅰ・Ⅱ〟等を担当されていますが、講義の内容というより、試験の時に、苦労される方が、多いのではないでしょうか。試験問題は、先生本人に言わせると、「最近は、昔ほど、ひねった問題はない」と、言っておりますが、相変わらず難しく、学生を悩ましています。その他、プリントの多さ、講義の合い間の冗談などを、思い出す人も多いでしょう。

製剤学教室の特徴というと、コンパ、旅行など、非常に教室行事が多いにもかかわらず、必ず、全員参加というのも少人数の教室ならではの長所ではないでしょうか。一方、他教室との対抗戦では、人数が少ないため、先生方も、総動員しなくてはならないなどという欠点もあるわけですが……。

とにかく明るく賑やかな教室です。是非、大学に来た時は、手土産(ビールなど)を持って製剤学教室のドアを叩いて下さい。

田中義一(12期)

生薬学教室

卒業生の先生方におかれましては、ますます、御清栄のこととお慶び申し上げます。

会報編集担当者よりの御指名により、教室の近況について、御報告申し上げます。

まず、西部先生は、学生部長をやっておられ、毎日忙しく、昼食の弁当を食べるのを忘れ、夕方になってその弁当を見つけ、自分が昼食を食べていない事を思いだしたぐらいです。

県先生は、本学の薬草園の園長をやっておられ、6月26日AM7:00フジTV系の全国ネットワークの番組「トーク・シャワー」に出演され、ゲストのフォークシンガーのイルカにとても気に入られていました。

佐久嶋先生は、10数年前から乗り続けている愛車で、元気に通勤されています。

中谷先生(5期)は、花嫁募集中とのことで、この「教室だより」をお読みの独身男性の方からの御一報をお待ちしております。

笹原先生は、本州の大学を卒業されて、教室所属2年目の御嬢様先生です。

以上が、教室の先生方です。

又、行事等としましては、6月の九十九祭に出店し荒稼ぎをしておりました。

7月、恒例の北海道3大学生薬学教室対抗ソフトボール大会で、準優勝となり、88年の近鉄の10・19のような悔しさを味わいましたが、夜の懇親会のカラオケでは、明らかに優勝でした。

9月、王立デンマーク薬科大学助教授ヘレ・アウン博士(女性)が教室で約1ヶ月間研究されていきました。

又9月末には、秋の卒業式で、3名の4年生が巣立ち、同窓会会員ピカピカの一年生となりました。

12月上旬には、登別へ一泊旅行に行っているはずです。

なお、学生等の構成は、少々歳は、とっているけれど、とても素敵な大学院一年生一人(本人)と4年生14名(内女子3名)です。

学生の特質としては、今、はやりのジュニアが、ここにもいます。卒業生の皆様が、御世話になりました門間助教授の御子息(一見、近藤真彦に似ていて、スポーツ万能で、4年生のリーダー格)や、大学事務局の土産田局長の御令嬢が、おられることです。

4年生も、もうすぐ卒業ですが、もし卒業生の皆様と同じ会社等へ勤務いたしましたら御指導の程、よろしくお願い申し上げます。

以上で、御報告を終ります。

最後に、卒業生の方で、漢方薬に携わっている先生が、おられましたら、教室へ一度、遊びにこられたらよいと思います。企業秘密が聞けるかもしれません。

武村仁志(4期)

毒理学教室

卒業生の皆様、いかがお過ごしでしょうか?本学も開学以来、はやくも15年になろうとしています。私がこの毒理学教室に配属になってから、3年が過ぎ、教室の雰囲気もだいたいわかる頃であろうからと、教室紹介の原稿を依頼されましたので、私の所属する毒理学教室を紹介がてら近況をご報告させていただきます。

初期の卒業生の方々の中には毒理学教室をご存じ無い方もいらっしゃると思いますが、当教室は、六期生の時に薬理学教室より分れて出来た教室です。現在のスタッフは、主に薬理学や臨床の講義を担当されている南 勝兼担教授、毒理学の講義を担当されている須藤純一助教授、そして、いまだに20歳代と言っても通用しそうな二期卒の山崎信彦助手、鈴江敏彦助手、どこから見てもマイホームパパの大学院博士課程三年生の鈴木義裕さん、さらに、研究生の林森司さん、そして大学院修士課程二年生の私の7名のスタッフで構成されています。現在、配属されている四年生が9名おり、スタッフと合わせて16名となり、他の教室と比べると割合小さな教室です。しかし少人数であるがゆえに、先生方をはじめスタッフと学生達の間の壁が無く、とても先生が身近に感じられ、みんな和気あいあい、楽しく過ごせる利点があります。先日も四年生全員が演習試験で100番以内に入り、かねてからの約束であった先生方のご馳走に預かったばかりです。

ご存じの方も多いと思いますが須藤先生は、一昨年ご結婚されまして、さらには昨年、長男の大地君が誕生されました。私は一つ発見したのですが、須藤先生は非常に子供好きのようです。当教室では、私以外の方は皆お子様がいらっしゃるので子供の話で盛り上がることもしばしばであります。そのような時、とくに大地君の話題になると急に須藤先生の顔が緩み、にこやかになります。ここだけの話ですが先生は、よく夜、ベビー用品、特に紙おむつなどを買いに走るとおっしゃっていました。また、安く売っている店の研究もよく行っていらっしゃるようです。

現在、当教室では、抗生物質による腎毒性の発生機序や防御効果、また、カテコールアミンの体内動態などについて研究が進められています。特に鈴木さんは、来年3月にせまった薬学博士の学位の取得のために、連日夜遅くまで論文の作成に追われています。かく言う私もそろそろ卒業に向けて、焦って来ている所です。

以上、簡単ではありますが毒理学教室の近況を報告させていただきました。卒業生の皆様、大学にお越しの際には是非、当教室にお立ち寄りください。

漆原 篤(11期)

随筆欄

近頃思うこと……

米田 裕子（7期）

ごく最近、薬剤師会誌に掲載されていた視点で、印象に残った記述があったので、こうして投稿しようと思いました。

アメリカの全国紙に「アメリカ国民が、最も正直で、倫理水準の高い職業人と考えているのは――薬剤師」と、掲載されていたそうです。もう少し詳しく書くと、アメリカの世論調査で有名なギャラップが、〝正直で、倫理水準の高い職業人〟を問い掛けたところ、66%の高い率で薬剤師――・聖職者60%――大学教師54%――医師53%――を凌ぐ数字で、アメリカ国民が支持したようです。日本で同じような調査をしても、同様の結果が出るかどうかはわかりませんが、薬剤師としては誇りに思えるような活字です。

私が管理薬剤師として、この会社の試験室へ入って、三年が過ぎました。一年目は、一般用医薬品の概要を把握するのに精一杯で、地域医療への貢献の必要性を認識し、一つ一つ仕事を重ねて、GMPの充実、かぜ、解熱鎮痛薬の製造承認、再評価への検討と、次から次へと、勉強することが追ってきたものです。どんな仕事でもそうなのかもしれませんが、人一倍ケアレスミスが懸念される私は、慎重な見直し、度重なる監査を経、いつも心に余裕というものがなく、張りつめた緊張感に取り巻かれ続けた仕事でした。人には、多種多様に技術面、対人面で、能力の差異がみられます。私は現在、物――つまり〝医薬品〟を対象とした業務に携っています。「医薬品の恐ろしさを充分に理解している上で、正確な調剤の重要性」を身にしみて、感じていなければなりません。それは、仕事を繰り返し、推考するうち、自ら身についた価値観でもありますが、これがいわゆる〝倫理水準〟というものに、つながりゆくのではないでしょうか。

しかし、物へ対する感覚だけでは、バランスはとれていません。私の仕事は、試験室へこもりがちで、液体クロマトや、TLCなど機器と対応し、データー処理でもコンピューターとの会話ですが、もう少し落ち着いたら、消費者の人々との接点も持てるようになりたいと思っています。そうすれば、服用側のニーズに応えるべく、ディテール出来るのではないかと思えます。対物へと、対人へとのバランスを考えながら、より倫理水準の向上を考えてゆきたいものです。

S45年にかぜ薬の製造承認基準の設定より始まって、第10番目、駆虫薬製造承認地方委任が認可されました。近年のグルメブームによる生食などによる回虫・ぎょう虫への配慮に加え、アレルギーに由来するアレルゲンであるダニなどへの対応で、現実化したものですが、私社では、駆虫薬は取り扱っていません。ただ、現在検討しなければならないのは、市場で知名度の高い「救心」に類似の臓器薬を製造していて、その含有主成分である「ジャコウ」です。S50年に、日本がワシントン条約に加入して以来、野性動物の絶滅よりの保護のため、近年ジャコウの国際取引きが規制され、一昨年は留保撤回、昨年は、厚生省より、ジャコウ含有製剤からのジャコウ削除が通知され、今年四月より、局方(11局)よりジャコウが削除されました。そこで、私社には、ジャコウ含有製剤が、三品目あるのですが、それらの原点からの見直しと、新しく製造承認を受けるべく、試作、試験データーの作成に去年一年取り組み、なかなか困難でした。生薬の場合は、定量結果が、産地や年度によって、バラツキが大きいため、規格設定が、巾記載になってしまいます。次から次へと、こうして書面上では、流れるように書いていますが、挫けそうになること、ストレスの蓄積、一品目の製剤の製造承認を受けるまでの道のりは、容易なものではありません。

今年の二月に私は次女を出産し、子育ても並行しているのですが、かぜ、解熱鎮痛薬の許可を受けるときは、長女の育児、そして、次女の育児と今回の臓器薬の達成、いずれも、それぞれの製剤の製造承認の許可が、我子のようで、一つ一つがかけがえなく、自らの手で、産み、育み、悩み、慈しむ――製剤も子供のように思えてしまいます。

創り出すということは、原始の時代よりの人々の英知と努力の積み重ねです。そして、今日までの、進歩を、次代へ架橋し、より発展させることが、今の私たちに課せられています。それは大学にとっても同様です。ここまで、私たち先輩方の成果の結晶を無にしてはなりません。それらを私たち、次の時代の同窓生達で、進展させる――大学という生命の育成――を担っているのです。

クラブ紹介②

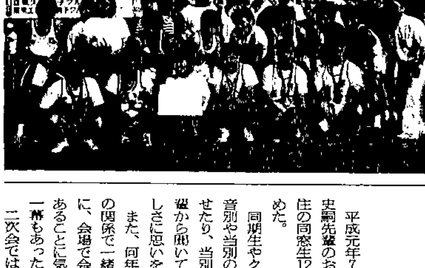
ボート部

斉 政彦（12期）

ボート部は'78年に歯学部一期生らによって創立されました。部員は歯学部が多い中で薬学部も大いに活躍しています。'82年から漕艇協会に加盟しレースに参戦してますが道内では比較的新しいクラブです。夏は茨戸湖で他校と共に練習していますが冬は体育館で走り込みと筋トレの毎日です。昨年は学友会で新しいボートの購入が決定しました。そして、今年6月に新艇「オンディーヌ(UNDENU：ドイツ語で妖精の意)」が届きました。ボート部が待ち望んでいたカーボン艇でした。

7月にこのオンディーヌは初レースである全道医師対抗レガッタで優勝しました。小さな大会ではありましたが、歴史のある北大医学部に勝ち観戦していた僕たちの胸も熱くなりました。このレース参戦7年目の念願の勝利でした。更に8月戸田オリンピックコースで行われた全国歯科学生レガッタでも総合優勝をしました。後輩や歯学部の同輩の活躍は自分の事のようにうれしく思いました。この活躍を祝って9月に祝賀会とOB会の発足を行いました。祝賀会にはほとんどの先輩方が集まり中には初めて目にする先輩も何人かおられました。僕が現役時代にコーチ役を勧めてくれた先輩にも久し振りに再会し、あの頃の想い出話しになつかしい時間を過せました。

11月にはOB戦がありました。ボート部のOB戦は来春卒業する部員の為の学生最後の記念レースとして行っています。今年は歯学部6年生の2人だけですが、この先輩たちは僕と'87年に対抗クルーを組んでいた2人でした。今年の優勝クルーの中にもその他の2人がいて、5人で'87対抗クルーを再結成し、来年の'90対抗クルーとなる後輩たちと、6年間の学生時代最後のレースを行いました。結果は勿論'87対抗クルーの勝利でした。現役ほどのキレはありませんでしたが、気迫はまさにあの頃のままでした。



ゴールからランディングに向う頃、茨戸の陽はすっかり落ちていました。僕たちの練習はいつもこうでした。他校が艇から降りる頃、僕たちは茨戸にやっと着きます。それから、誰も居なくなった暗い茨戸湖で延々と漕ぎ続けました。オールの水を切る音だけが湖面に響き、ただ、ただ速くなりたいという思いだけで漕ぎ続けていました。苦しい事も悲しい事もうれしい事もすべてここで生まれていきました。そんな現役時代を思い出させてくれる一日でした。

ボートはスター選手の存在しない競技です。距離にして1000m、時間で4分足らずですが5人の力が、心が一つにならないとボートは真直には進んでくれません。5人が一つになった時、その力は2倍にも3倍にもなります。

この1000mのために毎日練習しつづけているのです。クラブの歴史は浅くまだまだこれからの部ですが、いつか、東日本学園大学ボート部が、「茨戸の華」といわれる日を夢見ながら、ボート部を見つめ続けて行きたいと思います。

バスケット部OB会

多田 正人（4期）

我が東日本学園大学バスケット部OB会は、昭和56年にOB有志により第一回が行われて以来、第五回までは年一回秋に、以後二年に一回と定めて今年の11月4日に第七回目のOB会が行われました。OB会の会員も両学部（薬学部は、第1期～12期生、歯学部は第1期～6期生）合わせて70名を越える会員がいます。第七回OB会は午後一時より大学体育館において現役女子の紅白戦に続いて、現役対OBの試合を二試合行いました。一試合目の対下級生現役チームには、前半負けていたのを後半逆転勝ちしてなんとか面目を保ちましたが、二試合目の現役レギュラーチームには惨敗を余儀無くされ、出場のOBも22歳～30歳と、現役の若さ溢れる動きにはついて行けずに、選手交替の連続、年齢の差をまざまざと感じる試合でした。OBは口々に「昔は自分も、あんなに身体が動いていたかな?」と青春時代のワンゴールにかけた時を懐しく思い出し、楽しくゲームを終えました。夜は札幌に場所を変え、OB30余名と現役数名に加えて薬学部の森先生と教養部の森田先生も参加されて無礼講の飲み会となりましたが、久しぶりに会ったせいか話が盛り上り時間になってもなかなかおひらきにできず、又、二次会、三次会にも予定していたより多くの人が参加し、幹事の人は、大変だった様です。

OB会の参加者も道内各地や、中には遠く関東からかけつけてくれた人もいて、無事第七回OB会を終える事ができました。

また二年後の平成三年のOB会での再会にむけて、森田先生の「次回のOB戦までに皆体力をつけていい試合をまたしましょう」の言葉のとおり、本当に何年たっても快い汗を流して、楽しく語り合えるOB会の交流を末長く続けられる事を楽しみにしています。

今回参加の出来なかったOBの皆様、次回の平成三年の秋のOB会には、是非とも御参加下さいます様宜しくお願い致します。

お知らせ

九期入学の皆様へ

私たち九期生が母校東日本学園大学を卒業してはや5年が経とうとしています。また、皆様も（社会の）一医療人として御活躍のことと存じます。卒業の時に「五年後にみんなで会おう」との約束もあり、最近ではそろそろ計画をと言う声も聞かれます。そこで、ついにこの会を計画することとしました。日時、場所につきましては、平成二年十月頃に札幌で開きたいと考えております。日時、場所などについての御意見、御要望、また住所等の変更がございましたら下記まで至急御連絡下さい。発起人等の詳細が決まりましたらできるだけ早くご案内いたしますのでその折は、万障お繰り合せの上ご協力ご参加願います。

連絡先：
石狩郡当別町金沢1757
東日本学園大学薬学部
薬理学教室　浜上 尚也
Tel 01332(3)1211内222

仙台市在住 同窓生の集い

村中 浩文（6期）

平成元年7月15日2期生の永松史嗣先輩のお声がかりで仙台市在住の同窓生12名が集まり親睦を深めた。

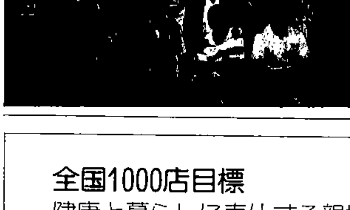
同期生やクラブの先輩、後輩と音別や当別の思い出話に花を咲かせたり、当別の街の変わり様を後輩から聞いて驚いたりと、皆懐かしさに思いを寄せていた。

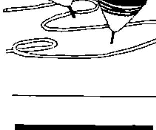
また、何年も製薬会社と代理店の関係で一緒に仕事をしていたのに、会場で会って初めて同窓生であることに気付いて皆に笑われる一幕もあった。

二次会では仙台名物〝国分町〟へ繰出し、酒が進むにしたがって全員が自慢の(?)のどを披露したり、使い捨てカメラ（誰が買ってきたのか分からないが）で浮気の現場写真を撮られたりと全く収拾がつかなくなってしまうくらいの盛り上がりとなった。

しかし最後には、近いうちに東北地方の同窓会を企画することと、再会を約束して全員で記念写真に収まり、三三五五に夜の国分町に消えて行った。

今後もこのような会に於いて先輩後輩の親睦を深めて行きたいものである。





編集後記

今シーズンの北海道は雪の降るのが例年より遅くとても過ごしやすい毎日です。

今年度は東日薬にとって忙しい年でした。創立10周年のイベントをはじめ、クラス会、同門会ならびに支部会など盛りだくさんの会合が開かれました。特に創立10周年記念祝賀会では、同窓会員の皆様の御協力のおかげをもちましてお忙しい中来賓65名、同窓会員120名と多数の御出席をいただき大変に盛会なものとなりました。本部事務局を代表いたしまして厚く御礼申し上げます。

また同門会も恒例化して参りました。これから同門会を行うという教室もあるようですのでまたその時の写真や記事を掲載する予定です。クラス会、支部会、クラブOB会など本部まで情報が届かず今回御紹介した以外にもまだまだ数多くあったのではないかと思います。どうぞ遠慮なく編集部まで記事をお送り下さい。また企画中の会合のPRにも御利用下さい。

遠藤 泰（4期）

全国1000店目標
健康と暮らしに奉仕する親切第一の店
株式会社 クスリのツルハ
コントロールセンター
代表取締役 鶴羽 肇
札幌本部 〒065 札幌市東区北24条東20丁目
電話(代) (011) 783－2754
旭川本部 〒078 旭川市6条通23丁目381番地の3
コントロールセンター 電話(代) (0166) 34－1193